View Special 特集

今時の高校生と

自分をなくした生徒たちとどう向き合うか

「一番の悩みは、生徒の家庭学習時間の減少です。また、明確な目的意識を持って大学に進学する生徒も、少なくなっている気がしますね」

こう語るのはある地方の公立進学高校の教師。この教師に限らず、生徒の学習意欲の低下、将来への目的意識の希薄化を危惧する声は少なくない。

ベネッセ教育研究所が高校生に行ってきた調査でも、教師の不安を裏づけるデータが出ている。高校生に「勉強上の悩み」を挙げさせたところ、「どうして、こんなことを勉強しなければいけないのかと思う」が、'90年では56・8%だったのに対し、6年後の'96年には66・4%に跳ね上がった（表1参照）。また「今、自分が本当にしたいことがわからない」「今の自分は本当の自分ではないと思う」という生徒がかなりの割合に達している（表2参照）など、自我を確立できず、自分の将来像をつかみかねている子どもたちが多いことがうかがえる。

幼稚園から小・中・高まで、さまざまな教室を観察してきた東京大大学院教育学研究科の佐藤学教授（学校教育学）も、「子どもたちは学ぶこと、目的意識を持って生きることから逃げつつあることを強く感じる」と指摘する。

「日本の子どもは、勉強に追われてゆとりを失っているというのが一般的な見方。確かにかつてはそうでしたが、今は一部の子どもを除いて、多くが勉強しなくなっています。総務庁が'95年に、日本・アメリカ・韓国の7歳から15歳の子どもの学習時間を調査したのですが、日本は最下位で、韓国の子どもよりかなり少ないということがわかりました。高校でもこの状況は、基本的には変わらないはずです」

illustration : TanakaYasuo

生きる目的が見えにくくなってしまった日本の社会

ではなぜ、高校生を含めた子どもたちは、学びから逃げようとしているのだろうか。まず考えるべきは、これまで社会や教師が生徒に向かって語ってきた学ぶことの意義、目的が、もはや生徒にとってリアリティを失ってきているのではないだろうか、ということである。

「日本の教育は長い間、競争意識を道具として生徒の学びへの意欲を高めるという手法をとってきました。しかし、勉強して一流大学に進学、大手企業に就職イコールいい人生といった神話は、一部の層を除いてリアリティを持たなくなっています。そんな中で生徒は、わざわざ自らをつらい競争に駆り立てる意欲を失っています。また、私が学生だった'70年代前半までは、東京大にも定時制高校出身者などいろんな学生がいたんですが、今は学生が育った家庭を見ると、親が高収入で高学歴というケースがほとんど。親が高学歴の家庭は子どもも高学歴といった状況が進めば、競争が機能しなくなるということですから、その点でも、競争を勉強意欲への道具として使うことが有効ではなくなってきています」

表1　勉強上の悩み

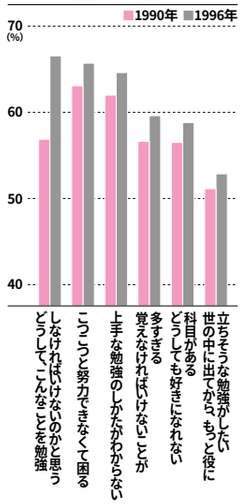


表2　さまよえる高校生

	非常にあてはまる	かなりあてはまる
今、自分が本当にしたいことがわからない	18.9(%)	21.8(%)
1人で初めてのことをするのが心配である	14.5	38.1
今の自分は本当の自分ではないと思う	14.7	19.2

これからの指導

生徒の目的意識の希薄化については、バブル経済の崩壊以降、日本社会全体が共通の目的を失ったことが大きいという。社会の進むべき方向性がはっきりしていた時代なら、生徒もそれに同化・反発しながら自らの進路を定めることもできたが、今は生きる目当てを生徒が明確に持てなくなっている。

「今の生徒は、ひと言でいうとニヒリズムに陥っています。高校の先生方は生徒に向かって、なんで未来に対して意欲的になれないのだろうかと嘆きます。しかしむしろ問題なのは、社会や教育の側が生徒たちに対して、あるべき生き方像を提示できていないことなのではないでしょうか」

学校を他者との出会い、発見の場にするために

目的意識が明確な生徒は、学習に対しても積極的な態度を見せる。これは多くの教師が生徒と接する日常の中で感じていることだ。だが社会全体が方向性を失っている状況の中で、生徒に将来に対する目的意識、学習意欲を身につけさせるのは、それなりの努力が必要となる。

「生徒の意欲を高めていくためには、先生方がさまざまなしかけをしていくことが大切でしょうね。学びから逃げている生徒を見ていると、学校を離れてアルバイトなど、街の中に新しい社会的関係を求めている子どもも多いんですね。でも本来ならば学校こそ、異質な他者と他者がつながっていく場、大人や社会と出会いながら自分の生き方をつかみ取っていく場として機能しなくてはいけないのです。学校が新しい発見のある場所であるならば、生徒の学びに対する態度も変わってくるはずです」

佐藤教授は具体的な試みの例として、社会のいろいろな分野で活躍している高校の卒業生を呼んで、仕事や生き方、学ぶことの大切さを語ってもらうという行事を挙げる。生徒は先輩の姿に自分を重ねながら、将来像を思い描くことができる。また現代社会には、環境問題や国際問題などさまざまな課題が山積している。そういった社会的課題を自分自身の問題として考えさせるきっかけを生徒にうまく与えられれば、生徒も自ら積極的に学びへと向かうようになるだろうという。

「社会自体は目的を失っていますが、自分の人生をかけるに値するテーマはたくさんあるし、実際に魅力的な生き方をしている人もたくさんいます。だから生徒にそのことを気づかせるしかけをすることがなにより大切。うまく機能すれば、生徒はこちらが考えている以上に伸びるはずです。実際に私もそういう例を、いくつも見てきましたからね」

生徒は今、学ぶこと、自分と向き合うことから逃走し始めている。これまでとは違う「生徒」に対して、教師の側にはどのような指導を行うことが求められているのだろうか。

編集部より

生徒の目的意識を高めるこれからの指導とは？

受験・偏差値偏重型の指導では、生徒はついてこなくなってきているといわれて久しい。また、生徒の将来に対する目的意識や学習意欲の低下も問題となっている。そんな現状を打破するために、現場にはどのようなスタンスでの指導が望まれるのだろう。

1 なぜ生きるのか、なぜ学ぶのかを発見させる

難関大に合格すれば幸せな生活が待っているという一元的な価値観の押しつけは、もはや生徒に通用しない時代となった。そこで重要なのが、進路指導の本来の姿である「どう生きたいのか、そのためになにを学ぶのか」を生徒に考えさせ、選択させるということだ。大学時代だけでなく、自分の人生全体を思い描かせる工夫が必要だ。

「なにがしたいのか、そのためにはなにを学びたいか」を発見した生徒は、「今の自分に足りないものはなにか」を確認して、目標の実現に向けて自ら歩み始めるようになる。今の自分からなりたい自分に近づく努力、それこそが学習なのだ。

最近の高校生は「自分が好きなものには夢中になるが、興味のないものに対しては、全く取り組もうとしない」といわれる。しかし、子どもたちが描いている将来の夢や理想を実現させるためには、最低限の基礎的な学力は必要である。そして、知識を吸収していくことは、自分が興味・関心を持っているテーマを深めることや、未知に対する知的好奇心を育てることにもつながっていく。このことを生徒たちに体験させるしかけを、積極的に与えていきたい。

2 自己発見、自己理解のための環境を整える

人は、さまざまな社会経験や人間関係の中から「どう生きるか、なにを学ぶか」を考えるようになる。そこで進路意識を醸成させるためには、異なる環境で育ってきた、異質な価値観を持つ者が集う場として、クラスを有効に活用したい。

ベネッセ教育研究所の調査「高校生の親友との関係」（表3参照）を見ると、高校生は親友に対して「負けないように努力」「尊敬」していることがうかがえる。お互いに切磋琢磨しながら向上していくという姿は、現代の高校生の間にも残っていることがわかる。お互いの気持ちを率直にぶつけ合うことができ、心の通い合うような友人関係を作り上げているクラスほど、目的意識が高く、学びに対する姿勢が育つのではないだろうか。

しかし、一方で「クラスメートとの人間関係」（表4参照）を見ると、クラスメートを「それなりに合わせていける人」「たまたま同じクラスという感じの人」と感じている高校生が多く、今のクラスは表層的な友人関係にあるという一面を持っていることがわかる。このようなクラスメートとの関係を変えていくために、いっしょに行動する機会を作ることが必要となる。

例えば「将来の自分像」というテーマで小論文を書かせて、クラスメート同士の間で相互評価させるのも有効だろう。友人の心の中をかい間見ることは、心を通わすことのできる関係を築くことにつながり、他者からの自分に対する評価を知ることで、閉塞的な自分主義を越えた自己理解につながるはずだ。また、企業訪問など教室から飛び出しての体験学習も、異なる価値観との出合いを生み、自分の気持ちと重ね合わせると自己理解を深めることができるようになる。

3 教師の側が、進路指導のストーリーを持つ

生徒に「どう生きるために、なにを学ぶか」を発見させるためには、教師の側がタイミングよく生徒にヒントや刺激を与えながら、少しずつ目的意識を高めさせていくことが必要となる。そのための進路指導の手順として、具体的には以下のプロセスが考えられる。

①まずは生徒に自分の興味の方向性を確認させる。

②その興味を仕事に結びつけたり、深く研究するには、どの分野に進めばいいかを情報収集・検討させる。目標が定まることで「なりたい自分」が明確になる。

③「なりたい自分」と「今の自分」のギャップを認識させる。「なりたい自分」になるためには、なにが未達成なのかを把握させ、目標をアクションに結びつければ学習意欲は向上する。

④「なりたい自分」に近づけるように努力している生徒に対しては、未達成を達成に近づけるための助言と励ましが必要である。

もちろんこのようなプロセスは、あくまでも理想型。「なりたい自分」になるために努力させようにも、実際には「やりたいことさえ見つからない」という生徒の方が多いのが現実だ。したがって、〝自分探し〟のためのしかけを準備することがポイントになる。

ある県立高校では、1年生に興味のある学問領域に関する調査レポートを書かせている。そしてクラスメートでレポートを相互に読ませる試みをしている。「ほかの生徒が自分の興味のある分野にどのようにアプローチしたか」がわかるし、「その分野のどこが魅力的か」「興味のある分野を調べるにはどうすればいいか」を他者のレポートを通じて知ることができる。2年次では学問領域のレポートだけでなく、将来の希望職業に関する調査レポートも書かせているという。

今、さまざまな高校で生徒のモチベーションを高めていく工夫、試みが行われている。これらの指導はいわゆる押しつけ型の指導（一方向的指導）ではなく、生徒が自ら考え、歩き始めることを狙ったものだ。それだけに教師にとっては事前の準備も難しく、ときにハプニングを伴う指導でもある。しかし、生徒の主体性を尊重し、生徒をよき1人の人間として見つめることができたとき、〝生徒に学ぶこと〟（双方向的指導）の喜びを味わえるはずだ。

表3 高校生の親友との関係

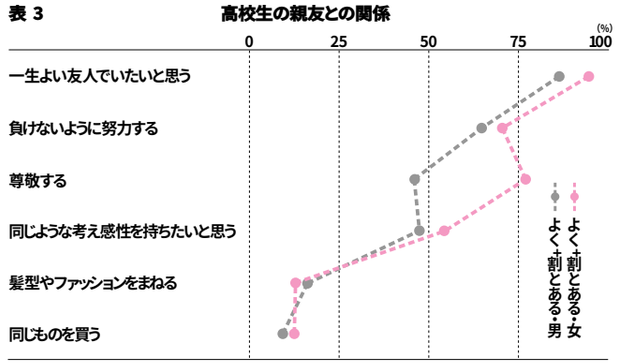
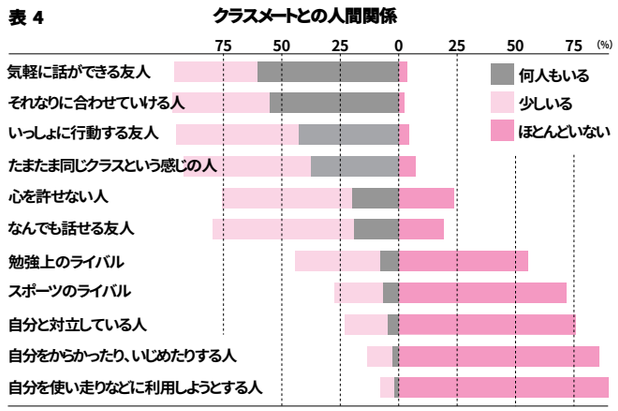
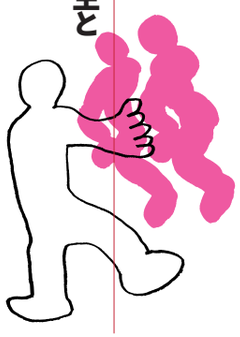


表4 クラスメートとの人間関係



※表1、3、4はベネッセ教育研究所、表2は福武教育振興財団調べ。表1は『第2回学習基本調査報告書高校生版』（1997年）、表2は『高校生の進路観調査報告書』（1996年）、表3は『モノグラフ・高校生VOL.44』（1995年）、表4は『モノグラフ・高校生VOL.49』（1997年）より。



各高校の試み

青森県立
三本木高校

自分に引きつけて物事を考える場を与える

「一生だれにもいわないつもりでした。でも今だから話します」

1人の生徒が涙をこらえながら、自分がいじめの加害者であった過去をみんなの前で語り始めたとき、三戸延聖先生は自分の試みが思いがけない方向に動き出すのを感じていた。

きっかけは昨年神戸で起きた14歳の少年による連続児童殺傷事件。小論文の素材として、この事件を扱おうと考えた三戸先生は、情報を集めるほど事件の持つ意味が深く広く、根底から考えてみる必要があると考えた。そこで昨年の10月から2か月間、学年を越えて生徒たちが参加し、事件について話し合ってもらう公開フォーラムの場を設けることにした。

「1回目のフォーラムは傍聴席を150席ほど設け、パネラー役の生徒の緊張が高まるような状況をあえて設定しました。記録を取り、客観的に分析するためにビデオカメラも用意しました。重圧の中でも自分の意見を話せることがねらいです。やはり生徒はうまく話せない様子でした。2回目は逆にパネラーだけを集めた非公開の討論に切り替え、本音が出やすい環境にしました。生徒は少しずつ自分の意見を語るようになりました。そして3回目は50人程度の参加人数にして、再び公開したんです。いじめの問題に発展したのはこのときです。司会も生徒に任せていたんですが、パネラーの積極的な意見に触発され、参加している生徒の言葉が熱を帯びてくるのがわかりました。神戸の事件を、自分のことに引きつけて考えるようになったんです」

自分の問題として議論

三戸先生はこのフォーラムの期間中、何度か生徒たちに小論文を書かせている。パネリスト役の生徒に「神戸市連続児童殺傷事件についての私見」を書かせ、その小論文に対する意見をほかの生徒たちから募るというユニークな試みも行った。自分の意見に対して寄せられた数多くの賛成・反対意見の作文を、パネラー役の生徒は興味深く読んでいたという。小論文はすべて公開を前提としており、記名式で書くことを原則とした。文章を書くことの責任の重さを自覚させたかったからだ。

生徒の書いた小論文を読むと、さすがに活発なフォーラムが行われただけあって、みんな自分の言葉で、そしてできるだけ論理的に書こうとしている様子がうかがえた。実は今回、このテーマに取り組んだ先生のねらいは、生徒たちに社会的な事件を自分の問題に引きつけて考えさせ、自分の言葉で語らせたいという点にあった。最近の高校生は社会的な関心を持たず、また自分自身とも向き合おうとしなくなっているといわれている。三戸先生にとって神戸の事件は、そんな生徒たちを変えていくために避けることができない題材のように思えた。

「神戸の事件について語るときには、家族や友人関係、学校のあり方など、自分にとって身近な存在について考えることから出発せざるをえません。実際にフォーラムでの生徒の発言によってあらわになったのは、みんな不安の中でバランスを取りながら学校生活を送っているのだということ。他人事では済まされない事件だったからこそ、テーマとして取り上げて成功だったと思います」

3者対等で源氏を読む

三戸先生は、神戸のような社会的問題だけでなく教科学習を通しても、生徒が自分に引きつけて物事を考えるようになるための試みを行った。英語版『源氏物語（夕顔の巻）』を基調に、原文を照合させて読み込むという課外ゼミ（2年生の参加希望者を対象）がそれ。三戸先生は国語教師だが、同僚の英語教師と連携をとり、昨年11月から約4か月間に渡って週1回の割合でゼミを展開した。

英語と古文を比較しながら読み込む作業は、英語を現代日本語に、古文を現代日本語に訳していくという一般的な学習スタイルを離れ、英語、古文、現代日本語を三角形に相互につなげて理解してみようという試みだった。普段の勉強だと、生徒たちは単語や文法を覚え、原文を訳していくという学習に偏りがち。だが『源氏物語』の原文の中には、どうしても英語に訳しにくい表現がある。今回の課外ゼミは生徒たちにとって、日本語と英語、日本文化と欧米文化の持っている根本的な差異を気づかせるきっかけになった。学習とは、ただ与えられたものをこなしていればいいものではないことを、実感できる場となったはずだ。

また、南アフリカから留学中の医大生をゼミに招いたことがあった。作品の背景となる宗教や風習、和歌に込められた心情などを巡って、自分たちとは異なる留学生のとらえ方に接し、「国際」や「文化」という言葉の持つ意味を、生徒はゼミを通して体験できたという。

「教師が生徒に向かって一方的に知識を教授する授業形式と違い、机を円の形にして、みんなで議論しながら進めていきました。私は英語ができないし、英語の先生は古文ができませんからね。そして生徒は、両方とも少しずつわからない。私は普段の授業では、いかにわかりやすく伝えるかを追求しているつもりですが、今回はあえてだれも理解していないというところからスタートしました。そのせいか、一つの作品を、私、英語の先生、生徒が全く違う読み方をする多様な意見が交わる場になりましたね。この違うということが、生徒の自主的な理解へとつながると思っています。また、英語に青ざめる私のカッコ悪い姿が、この場で、生徒たちにとっては喜ばしいものなのでしょう」

ゼミに参加した生徒は約20人。最初は戸惑いを見せていた彼らも、ゼミの後半には次第に乗ってくるようになった。これまで古文を「文法を覚えて訳す」といったレベルで理解しようとしていた生徒たちの中に、作品として読む視点が出てきている気がする、と先生は期待する。中には『源氏物語』を完読した者も現れたという。

自己を取り戻す環境を

先生はこのほかにも、昨年担任をしていた3年生のクラスで、生徒との交換日記を実践した。進路のことや友人関係の悩みなど、書くことで自分自身と向き合ってもらおうという目的だ。これまでも1冊のノートをみんなで書く「学級日誌」はあったが、今度は生徒と教師による1対1の対話になる。先生は交換日記によって、生徒の心の動きをできるだけつかみたいと考えていた。交換日記は義務教育段階ではよく使われる手法だが、高校生においても効果的であることがわかったという。

「交換日記を始めるといったときは教室中爆笑。でも拒否反応はなかったです。朝提出し、帰りのホームルームで返す。私も最初は誠実にと思って書き込んでいましたが、1か月、2か月となると意地の世界です。でもこの辺りから、生徒の本音が見えてくるんですよ。結局、最後まで書きとおした生徒は半数ぐらいでしたが、普段口数の少ない生徒に限って、毎日欠かさず書いてきましたね。そういう子というのは普段の生活だけでは、成績もそこそこであまりめだたないし、教師の側もどうしても気がつかないことが多いんです。彼らと、日記を通して話ができたことも大きな成果でした」

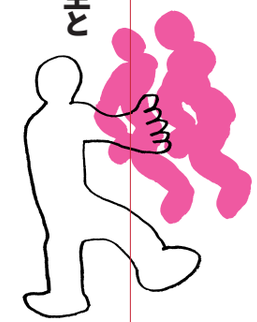
先生がこういう試みを手がけるのは〝自分がない子〟が増えている気がするからだという。何事に対しても積極的になれず、かといって非行に走ったりするほどでもない。そんな生徒が実際に目につくそうだ。

「私はハンドボール部の顧問もやっているのですが、教師の側が環境や状況を整えてあげないと、生徒が自分の力で部活動を楽しむことができなくなっているように思います。でもきっかけを与えてあげれば、生徒は大きく変わる可能性を持っています。神戸の事件を巡るフォーラムも、『源氏物語』を読む作業も、そして交換日記も、生徒に自分の力で考えさせ、自分を取り戻させるための環境作りなんですね。それは、教師自身もまた見失いそうになっている自分を取り戻す作業にもなると思います」

青森県立三本木高校
三戸延聖
国語科担当。新採用で三本木高校に赴任して以来、現在に至る。9年度は3年生の担任を務めた。

※三戸先生は4月より青森県立青森高校に異動されています。

View Special 特集
今時の高校生とこれからの指導



各高校の試み

埼玉県立 越谷北高校

環境作りとコミュニケーションを通して自主性を養う

越谷北高校があるのは埼玉県の東南部。高度経済成長期以降、東京のベットタウンとして発展した地域に当たる。都市部の進学校同様、長期休暇以外にも予備校に通う生徒が増えているのが特徴。同校でも'96年度に、3年生の予備校利用率が初めて50％を超えたという。進路指導部主任の斎藤聡先生は、この現状について次のように語る。

「予備校依存度の高まりと対象的に、学校の地位が落ちてきています。入試のノウハウを教えてくれるということで、予備校の先生への信頼ができてしまっているんです。特に、3年になるとみんなが予備校に行くし、自分も不安だから行かざるをえないのでしょう」

自分なりのやり方で勉強しようとしたところ、予備校の講師からうちのやり方以外のことはやる必要はないといわれるケースもあるようだ。

「塾や予備校だけの影響ではないのでしょうが、自分で工夫しながら学ぶという過程を大切にする生徒が減り、効率性だけを求める生徒が多くなってきています」

斎藤先生によると、最近は「読まない」「聞かない」「考えない」受け身な生徒が増えてきているという。書類を配っても読まない。自分の将来をどれだけ考えているかも見えてこない生徒がめだつのだそうだ。

指導体制の整備を

そんな中で斎藤先生は進路指導部主任として「生徒には、入れるところに行くという受け身ではなく、自分で調べて行きたいところに行くという姿勢を養わせたい」と語る。大学に入るだけがすべてではない。「自分のやりたいことを自分で見つけることが大切」という理念でやっているとのことだ。

そこで具体的に先生がまず取り組もうとしていることとして、クラスのLHRの改革が挙げられる。HRでの進路指導は、従来は学年団の裁量に任せてきたことから、学年により差が出るのが難点とされてきた。そこで進路指導部主導で3年間のHRの計画を立てることで、生徒の進路意識の醸成に向けてより細かな指導を行うようにしたいという。これによって学校の進路指導力がより高まることが期待できる。また昨年度から進路室には生徒用コンピュータを6台導入。大学や学部・学科について、生徒がいつでも自由に調べられるようにした。

生徒に応じた助言を

だがこれらの試みはあくまでも、生徒の進路意識向上のための体制面での整備にすぎない。重要なのは生徒の自主性を高めるために、その体制の中で教師がどのような姿勢で指導を行うかである。

「進路室にコンピュータを置いた目的の一つは、まず生徒に気軽に進路室に来てもらおうということ。生徒はパソコンに触るのが好きですからね。私自身も、空いている時間はなるべく進路室に行くようにしています。そして熱心にパソコンに向かっている生徒に対して、軽い感じで声をかけてみる。するとそこでちょっとした進路相談が始まり、本音を交えたいい話になるんです。その中から、生徒が自分で進路を決めていくうえでのヒントになるアドバイスをするようにしています。そういう先生と生徒がコミュニケーションを取れる機会を、いろんな場面で増やすことが大切だと思うんです」

難しいのは、生徒との距離の取り方だと先生はいう。あまり過保護に指導しすぎると生徒の自主性が育たず、突き放すとついてこない生徒が出てくる。

「そこは常に試行錯誤です。でも生徒1人ひとりの特徴をよく見ておくことだと思います。自立している生徒にはやりすぎない。フラフラしている生徒には、多少強制的になっても方向づけが必要。ただし、最終的な進路決定はあくまでも生徒自身。教師は情報を提供して生徒の調べる意欲を高め、迷ったときに助言を与える。それが基本だと思っています」

埼玉県立越谷北高校 斎藤聡
数学科担当。同校に勤務して10年。進路指導部常駐者の増員など、体制強化に力を入れる。進路指導部主任。

奈良県立 畝傍高校

生徒の心の変化を常にキャッチできる面談を

畝傍高校は、創立100年の歴史を誇る伝統校。関西地方の国公立大、難関私立大を中心に、高い進学実績を維持し続けてきた。進路指導副部長の上田英明先生は「本校の生徒は、畝傍高校で学びたいというあこがれを持って入学してくる者がほとんど。意欲のある生徒が多いですね」と語る。

同校では毎年、1年次の12月、1月の時期に「学習状況調査」と「志望校調査」を実施しているが、その結果は毎年ほとんど変化がないという。既に1年次の段階で、なんらかの志望校を念頭において勉強している生徒が、7、8割に上るそうだ。ただし、そんな畝傍高校の生徒でも、最近、変化が見られる面もあると進路指導部長の廣岡渉先生は語る。

「精神的に支えが必要な生徒が増えてきていますね。受験に向けて、あるいは社会の中でどのように進んでいけばいいのか、時折自分自身を見失う生徒が見すごせないほど出てきています。では彼らをどういうふうにケアしていくかというと、結局、面談という手立てしかないんじゃないかと思うんです」

生徒の変化をつかむ

畝傍高校は、面談にかなりの時間を割いている。4月、7月、11月に面談週間を設け、1人15分程度の面談を1週間かけて全生徒に行っている。このほか状況によって9月にも面談を実施する学年もあるし、3年生は入試直前の12月にも面談が設けられている。話される内容は、進路、学習、日々の生活についてなど実にさまざま。

「最近は、教師のところへなかなか相談にきてくれないおとなしい生徒が増えてきているように感じます。かといって、教師の側が気になっている生徒を個別に職員室に呼び出して面談を行うというのも、かえって生徒の気持ちを傷つけてしまう可能性もあります。だからこそ学校行事として公に面談週間を設けることが意味を持つんです」（廣岡先生）

もちろん生徒とのコミュニケーションは、面談週間だけでなく、随時行っていくことが重要。タイミングを逸すると、生徒が必要以上に悩みを抱え込んでしまう可能性もある。

「例えば、掃除中の雑談から、生徒が今悩んでいることなどを発見し、それに対してアドバイスすることもあります。朝のHRの時間に、生徒のちょっとした表情の変化も見すごさないようにしています。なにか特別なことをやろうというのではなく、生徒が発信している情報をこちらがキャッチして、それに的確に素早く応答できるというのが、面談であり、日々のコミュニケーションだと思います」（上田先生）

話しやすい雰囲気を

生徒の態度・行動の変化を見逃さず、適切な指導をする。言葉にするのは簡単だが、実践するのは難しい。畝傍高校の教師が、面談などによりそのことを実現できている理由はなんだろう。

「本校の生徒は、もともと相談上手が多いんですよ。授業が終わった後も、何人もの生徒が教師のところに質問に来ます。逆にいうと、先生方が授業を通して相談しやすい雰囲気を作っているのだと思います。これも特別なことが必要なわけではなく、生徒と向き合うときはお互いに納得できるように、できる限り丁寧に話し合うこと。そこに尽きますね」（廣岡先生）

生徒の悩み、思いがきちんと教師に伝わる環境を作り上げていることが、同校の生徒指導がうまく機能している一番の理由といえそうだ。

奈良県立畝傍高校 廣岡渉
数学科担当。進路指導部長。卒業生を招いての「先輩の話を聞く会」や「文化講演会」の実施にも力を入れている。

奈良県立畝傍高校 上田英明
数学科担当。進路指導副部長。畝傍高校に赴任して、今年度で9年目。生徒の日常の些細な変化に目を配る。

1.意見・1.感想をE.mail:view21@mail.benesse.co.jpまでお寄せください。